

MediamenteFalso

インスタグラムの人工「知能」は、投稿に含まれる記号にもとづいて投稿を選び分ける。先ごろ、私の絵を写した投稿にそれが起きた。

この件の逆説は、その伏せられた（検閲された）投稿こそが、近年の歴史におけるメディアの役割と、権力のために真実を操作するその能力について考えさせようとするものだった、ということだ。

作品に描かれているのは、東映のスーパーマリオがナチスの制帽をかぶった姿で、一九四五年四月十三日付『コリエーレ・デッラ・セーラ』の実物の紙面に油彩で描かれている。

その歴史的瞬間、イタリアはすでに二年前に連合国へ降伏していた。にもかかわらず、わが国の主要日刊紙は「勝利まで戦い抜く鉄の意志」と大見出しを掲げ、その脇には地図の上で軍事行動を練るヒトラーとムッソリーニの写真が載っていた。

その紙面の記事群が語るのは、誇張された空想の現実である。そこでは、ファシストがドイツの同盟国とともに、まもなくイタリアと植民地で戦争に勝つことが当然のように前提されている。

われわれの現実と並行する世界を舞台にした優れた連続ドラマ『高い城の男』（デイヴィッド・セメル演出、Amazon Prime Video）では、枢軸が戦争に勝ち、ドイツと日本が世界を分割している。だが全四十話のどこにもイタリアのファシストは出てこない。四五年のコリエーレの見出しは、八十年後のディストピア的虚構のなかにさえ足場を見つけれないのだ。

現実には、一九四五年四月十三日、ドイツ軍はスターリンの部隊にウィーンを奪われつつあった。その十二日後にイタリアはアメリカ軍によって解放され、十五日後にムッソリーニはパルチザンによって処刑されることになる。

コリエーレ紙の編集長エルマンノ・アミクッチは、あの日々に現実を操作することを選んだ。権力がまだナチス（ミラノを占領していた）とイタリア社会共和国のファシストの手中にあったからである。

今日、四五年以上に、他のあらゆる権力を動かす唯一の権力は経済である。だからこそインターネットは、千年紀のはじめにわれわれが築くのを手伝った、表現の自由と情報の自由な流通の場ではもはやない。経済のクラーケンがわれわれの玩具を奪い、それを金を生む機械へと変えてしまった。

インスタグラムも他のSNSも例外ではない。それらは知り合うためでも、分かち合うためでも、伝え合うためでもなく、市場をつくるためにある。

この文脈における検閲は、匿名の人工「知能」によって行われる。交換を促し、そこから生まれる経済的価値の創出を促すためだ。

試みられているのは、論争的な素材、差別、代替的な情報、暴力などをできるかぎり減らし、可能なかぎり包摂的な空間をつくること。そこでは全幅の信頼と安全のうちに売り買いができる。文化と芸術も、したがってこの至上命令に屈すべきだ、というわけだ。

よりよく売るには、楽しませ、些事を語り、語りの水準を誰にでもわかるところに保つのがよい。だからこそ、われわれが目にする投稿の大半は、悲喜劇的な事故や、蠱惑的な女たちや、そしてもちろん、指先ひとつで買える商品について語っている。

イタリアで七十年代に生まれた者は、これを書いている私もそうだが、われわれが目撃してきた数々の醜悪のなかに民間テレビの誕生を思い出す。そこでは初めて、愚かさや些事と大きな胸が、大半の番組の支配的な主題となった。これらの主題では広告収入があまりによく上がったため、RAIも事実の前に降参せざるをえず、今日では両者のあいだに受信料以外の違いはない。

ベルルスコーニがそれを最初に理解した人物だと言ってよい。したがって企業家として最良であり、結果として最も富み、のちには最も多く票を得た。

イタリア共和国の閣僚評議会議長、共和国大統領になるとまで取り沙汰された人物。ただ一つ、彼が気づいてさえいれば——有権者は些事と大きな胸を崇拜し、娼婦は大目に見るが、その客は許さないのだと。

昨日の、そして一昨日の新聞のなかには、過去において見られ、望まれた未来があり、未来において実現しなかった過去がある。虚偽が基準の体系にまで祭り上げられ、説得し扇動するために嘘がつかれ、そして何より戦争がある。この八十年の平和における唯一の恒常項である戦争が。

歴史はつねに勝者によって、政治的・軍事的な権力によって書かれてきた。

今日、過去も、歴史も、現在も、未来についての観念も、現実を欺瞞化する技術と報道の力によって書かれる。メッセージの受け手の自我をくすぐり、ついには、自分が眺めている現実の代用品こそが現実そのものだと信じ込ませるところまで。

代用品への依存は、人間の生のあらゆる面でますます存在感を増し、大半の人にとってそれは、革新的で、環境に優しく、解放的で、健康的で、改善的で、安全なものとして体験される。

ペットが、ロボットが、シリコン人形が、子や夫や妻や恋人や孫の代用品として使われる。美容整形は代用の身体と性的同一性を作るために使われる。ポルノと安全な性交は、性行為そのものを代用させる。合成食品、ヴィーガン食品、栄養バー、あらゆる領域で成果を得させる薬——人間そのものが、自分自身の代用品なのだ。

われわれの存在のもっとも親密で根本的な空間へ向けて、現実の生から遠ざけようとする商品と観念と行動が売り込まれる。虚構の、仮想の、合成された生へ向けて。そこでは内的な経験が、社会がわれわれについて抱く欺瞞的なイメージに置き換えられる。

無限に繰り返された嘘は真実にはならないが、欺瞞を社会的に容認される慣行にする。真実の感覚は、どんな真実も全部あるいは一部が欺瞞を含みうるという意識の陰に失われていく。

この文脈では、もっとも有能で寛大な人が、本当にしては出来すぎだと見えることがあり、もっとも卑劣な人が、でっち上げられた真実によって聖別されて見えることがある。

真実を定める権力を技術と報道のシステムに委ねることを受け入れるとき、われわれは、ある欺瞞を別の欺瞞よりも支えるために作られた情報の渦のなかで生きることを受け入れている。

るのだ。

コロナウイルスが引き起こした大混乱は、代用の、仮面をかぶった生の経験という考えを、いっそう好ましいものにした。そこでわれわれは、個々の人間と出会わずに集団の承認を求める。

われわれの時代の歴史を書くのは、やはり嘘でできた戦争の勝者たちだろう。だがわれわれが到達した技術的能力は、かつて見たことのない規模の欺瞞を作り出すことを可能にするだろう。

われわれは自分自身に嘘をつく。そして日ごとに、その現場を自分で押さえることが難しくなる。代用の生が、現実の生を呑み込んでいく。

私の脳のなかには、役に立ったり立たなかったりしながら蓄えられた膨大な量の映像がある。それらは思いもよらないときに飛び出してくる。ものを知りたいという私の欲求を満たそうとする、むなしい試みのなかで整理された視覚のメモだ。歪められ、時にすり減らされ、のちの出来事に照らして見直され、評価しなおされ、切り離され、文脈から孤立させられ、生がもたらす避けがたい忘却によって、記憶という神話的な小さな駱駝たちの絶え間ない襲撃と略奪によって、ねじ曲げられた映像。私の人生の映像、映画やテレビ番組の、ミュージックビデオの、展覧会や美術館の、コマーシャルの、人類の偶像たちの、本や物語の、そして私の夢の映像まで。

不協和な要素は、絵という果実のなかで、視覚的にも観念的にも、色彩の上でも形の上でも、喜劇的にも、宇宙的にも、超現実的にも、その和音をふたたび見いだす。

人物と風景、室内と空間——それらはひとつの大きなクロスオーバー・エピソードのものだ。私の「volupté de voir」から、自分の脳の秘密の部屋を歩きまわることから生まれた。アシモフのあのミクロの決死圏の内側に行く遊歩者のように。

この探索の遊びを通して、視覚的な引用のコラージュは、たえまない知的昇華となる。互いに作用しあう映像と記号の、アイコンとしての価値についての思弁に満ちた昇華だ。そこから生まれる物語は、映像そのものの自然な位置を無視することができず、それでいて新しい語りと新しい意味の道筋を引かずにはいられない。自分自身と他人とによって想像された映像の万華鏡は、歪んだ鏡のなかに、私たちが見たもの、見たと信じたもの、時を隔てて見るものの像を映し出す。見る—試す—考える—作り直す—また見る、という終わりのない反復のなかで。私たちは、見たもの、経験したものから創る。そして、自分が住みたいと想像している世界を、果てしなく創りなおしていく。

Luca Motolese

motolese.com — 原文はイタリア語